

国分境Ⅱ遺跡

1991

前橋市教育委員会

例 言

1. 本書は、小規模土地改良（農道舗装工事）に伴う調査報告書である。
 2. 本遺跡は、前橋市総社町総社2484番地先にあたり、3A-51を略称とする。調査面積は20m²である。
 3. 発掘調査は前橋市教育委員会文化財保護課が行なった。調査期間は平成3年7月25~26日に実施された。
- 調査 井野誠一・新保一美（文化財保護課）・飯島勝亥
整理 井野誠一・新保一美・飯島勝亥・柴崎まさ子・大塚美智子・生形かほる
神保千代子・赤城美代子
4. 調査にあたっては、土地改良課に多大なご協力を得た。
 5. 整理作業中に、綿貫綾子氏（群馬町教委）、坂塚誠氏（県埋文事業団）のご指導をいただいた。
 6. 関係図面及び遺物は前橋市教育委員会文化財保護課で行なっている。

凡 例

1. 各遺構の略称は次の通りである。
H：土師器使用の堅穴住居跡
2. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。
遺構：1/60、遺物 1/4

目 次

例言・凡例・目次	
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の環境と立地	1
III 遺構	2
IV 遺物	3
V まとめ	5
VI 写真図版	6

I 調査の経過

- 平成3年5月9日 開発予定地が埋蔵文化財包蔵地（国分境II遺跡）にあたり、試掘調査について、協議を実施した。
- タ 5月16日 土地改良課より該当地区の埋蔵文化財試掘調査の依頼が提出される。
- タ 5月29日 試掘調査実施、竪穴住居跡2棟が確認される。
事業者と協議を行ない、小規模であるので事業者の協力により、教育委員会が調査を実施することと決定する。
- タ 7月25・26日 調査を実施する。一棟は重複であり、計三棟が確認される。
現壁高が低く、排土量は少なかったが、H-2号ではカマド周辺で多量の遺物が出土した。

II 遺跡の環境と立地

本遺跡地は、西に国分境遺跡（関越道）、南に北原分中塚遺跡と山王庵寺跡と接する地にあたる。遺物も地表面に多くみられた。現状ではほぼ平坦であるが、調査の結果でみると、北側が高い南へのゆるやかな傾斜地であったようで、それを四十年代の土地改良で平らにしたものと考えられる。

遺跡は、農道部分のみの調査のため広がりは明確ではないが、東西方向で検出されている。検出住居跡も残存壁高が40cm程であり、耕作による削平が進んでいた。開発予定地25,800m²内で、工事施工時の全面掘削においても他に住居跡は検出されなかった。北側は旧くは高く、小さい塚もあったとのことで、遺構が北側にあったとしても削平されたものか。



基本層位

耕作による削平が進んでおり、耕作土下に住居壙土（黒色土）が住居内のみ検出されている。

III 遺構

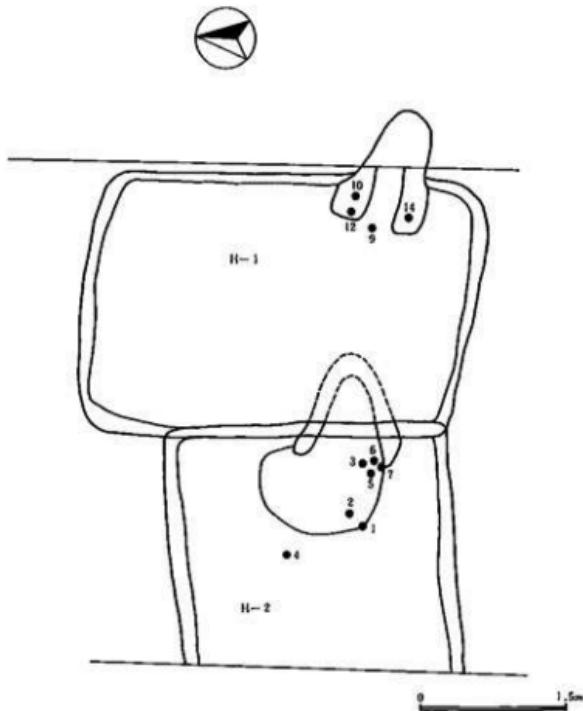
H-1号竪穴住居跡 東側の南北道路予定地より検出される。南北3.61m、東西2.50mで南北に長い長方形を呈する。周溝はみられない。カマドは東壁南より、東側1/4は調査区外にあたり未

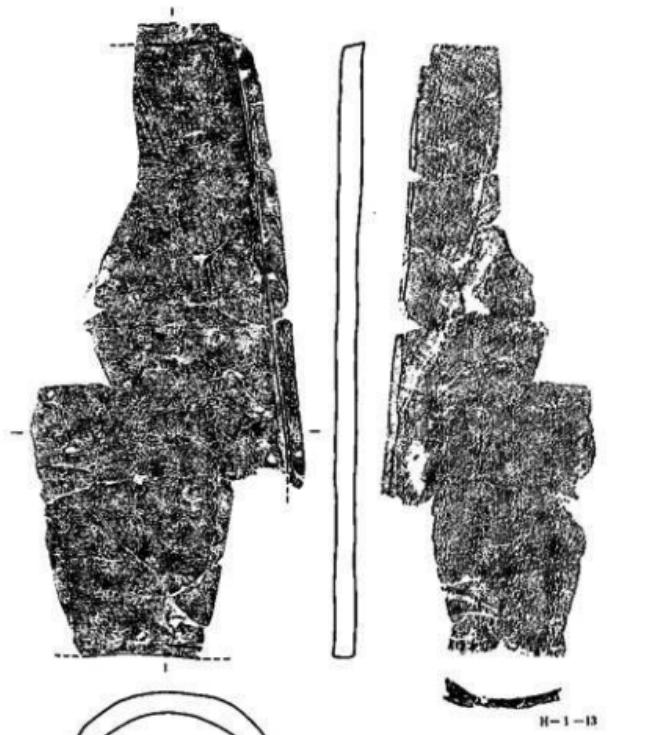
調査。カマドは粘土等で両袖を作つてあつたが、左袖内には丸瓦を封入してあつた。芯材としていたものか。供給先は山王庵寺か。カマド焚口前より須恵器蓋が検出されている。奈良時代末とみられる。これからみると、瓦の供給先はすでにこのころに瓦の供給が可能な状況になつてゐたと考えられる。

H—2号竪穴住居跡 H—1号の西側に重複する。西側は調査区外で未調査である。遺物からみると古墳時代後半の鬼高期のものであり、重複状況もH—2が旧く、合致する。南北2.52m、東西2.45m（現状）で、方形か、やや東西に長いと考えられる。カマドは東壁でやや南側に位置する。かなりくずれていたが、周囲より完形品を含めて多量の遺物が検出されている。口縁が平面形だ円を呈する壺は、類例が少ないものであり、完形品で、良い資料になるものと考えられる。

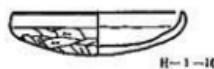
H—3号竪穴住居跡 H—1・2号西100mの南北道路予定地内。部分検出であり、遺物も小破片のみであるため時期は不明。H—1号に近い時期か。

H—1・2号 竪穴住居跡

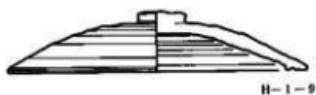




H-1-13



H-1-10

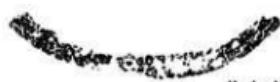
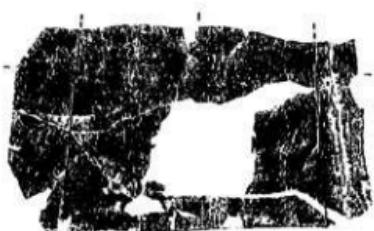


H-1-9

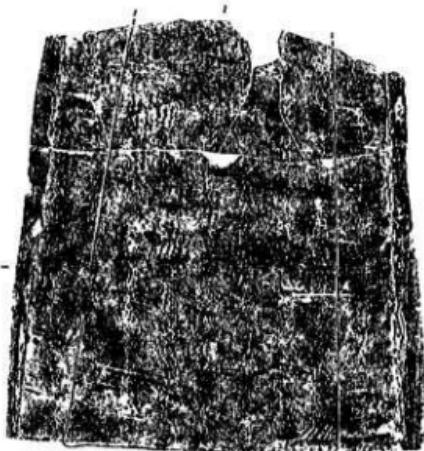


R-1-11

0 10 20 cm

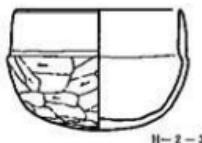
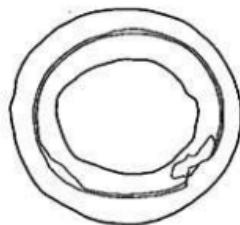


H-I-14

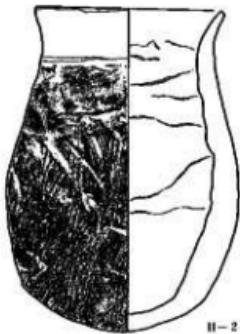


H-I-12

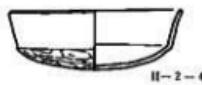
0 10 20 m



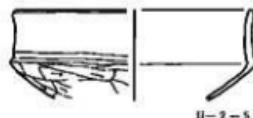
II-2-3



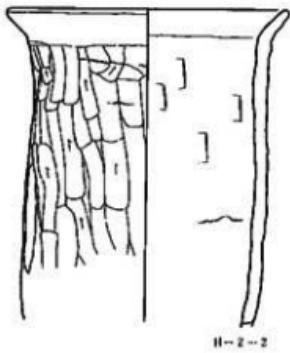
II-2-1



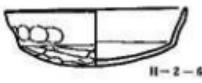
II-2-4



II-2-5



II-2-2



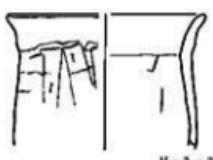
II-2-6



II-2-17



II-2-18



II-2-7



II-2-8

0 10 20cm

遺物観察表

番号	器種	法量(①器高②口径③底径)	技 法 等	胎土	①色調	②焼成	③残存度
1-9	須恵蓋	①4.0②20.2	内外面回転ナデ仕上げ	密	暗灰色	良	完形
1-10	土師壺	①2.9②11.4	口縁横ナデ、底部ヘラけずり	粗	茶褐色	良	70%
1-11	土師壺	①3.3 (現) ②18.9	口縁ナデ、底部ヘラけずり	*	*	並	30%
1-12	瓦	29.5×16.0×1.2	女瓦、糸切り、接合部ヘラ調整	密	灰白色	良	90%
1-13	瓦	41.5×13.6×1.4	男瓦 *	*	*	*	70%
1-14	瓦	13.9 (現) ×17.8×1.4	女瓦 *	*	*	*	40%
2-1	土師壺	①21.7②12.6	だ円口、輪積み、口縁ナデ、網タキ目	密	灰白色	良	完形
2-2	土師甕	①21.2 (現) ②18.8	口縁横ナデ、肩部ヘラけずり	粗	暗褐色	並	50%
2-3	土師壺	①8.1②11.1	*	*	密	茶褐色	良
2-4	土師壺	①3.9②11.6	口縁横ナデ、底部ヘラけずり	密	*	*	完形
2-5	土師壺	①5.9 (現) ②16.0	*	*	*	*	50%
2-6	土師壺	①3.8②12.2	*	*	粗	*	70%
2-7	土師甕	①9.0 (現) ②13.1	*	肩部ヘラけずり	*	黑褐色	良
2-8	須恵壺	①3.8②12.8	*	底部ナデ・ヘラけずり	密	灰黑色	良
2-17	須恵壺	①11.2 (現) ②19.3	*		*	*	15%
2-18	土壺	①11.1 (現) ②19.5	*	底部ヘラけずり	粗	茶褐色	良
							20%

ま と め

本調査では、北原分中塚遺跡で確認された住居跡の広がりが北にも広がっている事を示すものであるが、古墳時代からの住居跡がみられることで、旧くから開けていたことが明らかになった。また、古墳時代の住居跡の遺物H-2-1（鬼高期の6世紀中ごろ）は特異なもので、注目すべきものである。

また、奈良時代末の住居跡からはほぼ完形の丸瓦が検出されており、供給源と考えられる山王廃寺の盛裏とも係りがあるものと考えられる。現塔跡の西の金堂と考えられるものが、基段に瓦を含んで再建のものであり、当初とは異なる配置もありうことから、その変化とも係りをもつものか。

今回の調査が道路部分という遺跡地の一部のみの調査であったため全体像はつかみえない点が多いが、地区の歴史解明及び、今後の研究の資料となれば幸いである。

H-1号聚穴住居跡



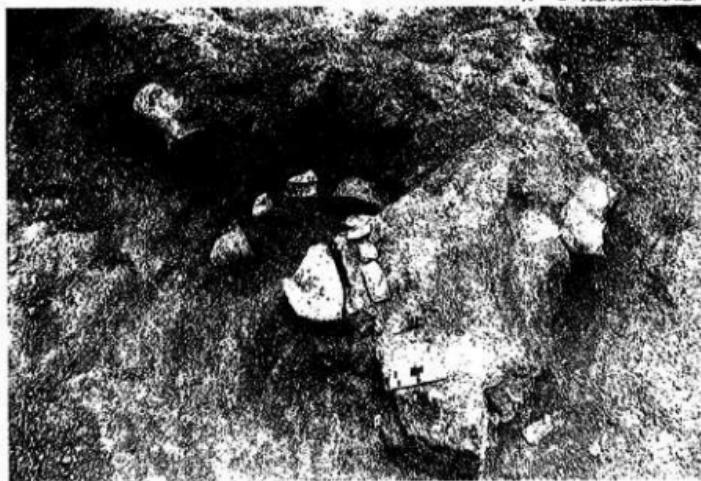
H-2号聚穴住居跡



H-1号遺物出土状態



H-2号遺物出土状態



国分境Ⅱ遺跡

印刷 平成4年3月20日

発行 平成4年3月30日

発行 前橋市教育委員会

印刷 株式会社前橋印刷所